

無知の知を反省するための抵抗の基準と貢献について

認識的不正義をめぐる議論を手がかりに

守博紀(高崎経済大学他非常勤講師)

本発表の目的は、近年の認識的不正義をめぐる議論を手がかりにして、〈自分がある問題を問題として認識できないことに対する鈍感さ〉に対する矯正策を提案することである。その要点は、〈歴史的事例の探究とそれを通した無知の知の自覚〉にあり、この主張のために、発表者はホセ・メディナが提示した「メタ鈍感(meta-insensitivity)」問題およびそれに対する対抗策としての「認識的アクティビズム(epistemic activism)」というアイデアを検討する。

「認識的不正義(epistemic injustice)」とは、「知る」という人間の主体性にとって本質的なはたらきが損なわれる事態を規範的に問題にするために提案された概念である。ミランダ・フリッカーの『認識的不正義』(Fricker 2007)の出版以来、この概念については国際的にも学際的にも多くの議論が積み重ねられている。本発表で検討するメディナの議論の出発点となるのは、認識的不正義に対する矯正策としてフリッカーが要請した徳理論的アプローチ、すなわち〈個人が偏見のはたらきを反省する徳を発揮すること〉という考えを批判的に吟味したエリザベス・アンダーソンの議論(Anderson 2012)である。

アンダーソンによれば、認識的不正義の克服のために個人の徳の発揮はたしかに重要ではあるが、その役割は、大規模な構造的貧困のなかで行われる個人の善意のように、限られたものにとどまる。アンダーソンが集団ベースの信用性欠如を引き起こす構造的要因として挙げるのは、信用性の指標を獲得するための教育などへのアクセスに差があること、自分が属する集団に対して好意的な判断を下しがちな自民族中心主義のバイアスがあること、頻繁に交流する者たちのあいだで世界についての見かたや判断が収束していく「共有現実バイアス」があること、の三つである。アンダーソンによれば、これらはいずれも集団間の「隔離(segregation)」に由来するものである。そのため、それに対する強制策として提案されるのは、教育や法制度、文化などの側面での「集団の統合(group integration)」であるとされる(cf. Anderson 2010)。

メディナは、認識的不正義に対する構造的アプローチを強調する以上のアンダーソンの議論を大枠で受け入れつつ、「統合」ではなく「相互行為(interaction)」の重要性を主張する。そこでの力点は、集団間の差異そのものに問題があるかのような含みのある「統合」に代えて、問題の個別性と非完結性を強調するための概念を提案することにある。すなわち、メディナは、(一)抽象化や一般化によって具体的な現実から注意がそらされないようにして個別の問題のそれぞれの特殊性を優先すること(理論構築に反対する個別主義)、(二)個別の問題への対応が現在および未来の経験のテストに開かれていること(没歴史的議論に反対する可謬主義)、(三)《何が最善か》についての固定されたイメージに縛られることなくものごとを現在よりもよい状態にすること(理想主義に反対する改良主義)、の三つのコミットメントを強調する。これらの論点が強調されるのは、認識的不正義(のとくに解釈的不正義)に由来する(ある不正義が不正義として適切に認識されない)という問題だけでなく、〈自分がある不正義を不正義として認識していないことにそもそも気づかない〉というより根の深い問題があるとメディナが考えているからだ。前者の問題が不正義に対する(一階の)鈍感さであるのに対して、後者の問題は、自分が鈍感であることに対する(二階の)鈍感さであるということから「メタ鈍感」と呼ばれる(Medina 2013: 75)。

メタ鈍感さは認識的不正義への対抗策を困難にするものだが、その理由は、メタ鈍感さによって認識的不正義を不正義として共有することが困難になるだけでなく、そもそもメタ鈍感さは誰にでもありうるからである。誰

にでも(自分がそれについて知らない)ということさえ知らないような問題はあるし、またその無知についての無知は多くのばあい、情動的関係のない他者の問題についてのものである。とりわけこの後者の点、すなわち、メタ鈍感さが認識的問題(知らないということを知らない)であるだけでなく情動的問題(他者と情動的关系を結ぶことが構造的に妨げられている)でもあるという点はその解決を困難にしている。そこでメディナが提案するのが、「認識的アクティビズム」である。認識的アクティビズムとは、問題となっている主題やその問題にかかわっている当事者をセンセーショナルに取り上げたり傍観者的に扱ったりするのではなく、その歴史的経緯を踏まえて社会の認識的資源の改善を目指すための運動であるとされ、その歴史的事例としては、とくに女性のアフリカ系アメリカ人のために戦ったアイダ・B・ウェルズや、アフリカ系アメリカ人に対する差別の撤廃のために活動した全米有色人種地位向上協議会が挙げられる(Medina 2018; 2019)。

認識的アクティビズムによる抵抗は、メディナが指摘するように、認識的不正義に対する対抗策でありながら同時に当の認識的不正義を被りやすい(ウェルズがアメリカ南部で激しく攻撃されたように)。それでは、このような抵抗はいかにして成功し、どのような貢献がありうるのだろうか。この問いに対して、発表者は、メディナの議論を批判的に検討しつつ、成功の基準については(抵抗にはそれに先立つ方法や指針や成否判断の基準がない)という点を、また貢献については(メタ鈍感の反省と顕在化)という点を指摘したい。個別の抵抗は単一の文脈での成否判定を拒む、ということは、運動の非完結性を主張するメディナの議論にも沿うものである。また、ある文脈で「失敗」と判定される(「あの人は問題を大げさに扱っている」と無視されるなど)としても、「しかじかの抵抗がしかじかの文脈で失敗とみなされた」という歴史的な累積そのものが将来可能な抵抗の資源になりうる、ということを発表者は主張したい。また、そこからの帰結として、認識的不正義に対する矯正策は、文脈に依存しない中立性を掲げる必要はなく、また歴史的な事実の探究を不可欠の要件とする、という論点も提示したい。

【参考文献】

- Anderson, Elizabeth (2010). *The Imperative of Integration*, Princeton: Princeton University Press.
- Anderson, Elizabeth (2012). “Epistemic Justice as a Virtue of Social Institutions.” *Social Epistemology* 26:2, 163–173. [アンダーソン、エリザベス(2022)「社会制度がもつ徳としての認識的正義」飯塚理恵訳、『分析フェミニズム基本論文集』木下頌子・渡辺一暁・飯塚理恵・小暮泰編訳、慶應義塾大学出版会、189–205頁。]
- Fricker, Miranda (2007). *Epistemic Injustice: Power and the Ethics of Knowing*, Oxford: Oxford University Press. [フリッカー、ミランダ(2023)『認識的不正義——権力は知ることの倫理にどのようにかかわるのか』佐藤邦政監訳、飯塚理恵訳、勁草書房。]
- Medina, José (2013). *The Epistemology of Resistance: Gender and Racial Oppression, Epistemic Injustice, and Resistant Imaginations*. Oxford: Oxford University Press.
- Medina, José (2018). “Resisting Racist Propaganda: Distorted Visual Communication and Epistemic Activism.” *The Southern Journal of Philosophy* 56, 50–75.
- Medina, José (2019). “Racial violence, emotional friction, and epistemic activism.” *Angelaki* 24.4: 22–37.